第６回テキスト研修会

2021年10月17日（日）
担当　橋場　千恵美

テキスト３---単元５「心を動かすには」

これまでテキスト３で「スピーチの構成」「例の生かし方」「表現の仕方」についてを学んできました。

聴衆の心を動かすには、この三つの単元が基本になります。

心を動かすスピーチ

スピーチの構成　＋　適切な例　＋　表現力

三単元で学んだことをしっかり理解し、自分のスピーチに活かすことができたとき、聴衆の心を動かすことができます。

１．心を動かすことの重要性

心が動かされる話には、中心人物が登場することが多いものです。
聴衆の心が動いている状態→話題の中心人物に気持が引きよせられ、自分がその人物になったかのように感情が動いたとき、もしくは共感したとき、心が動いた状態になる。
講師が話した事例をもとに、「心を動かすことの重要性」を考えて見ましょう。

（１）聞き手の興味が増大し、持続する

＊　聞き手の心を、話題の中心人物に引きよせ、次はどうなるのかと待ち構える聞き方が、聞き手の興味が増大し、持続している状態といえましょう。

・同じ親としては、伊藤さんの気持がよく分かる。子育ての誤りに気づいた伊藤さんは、そのあと、どうするのだろう。武君はどうなってしまうのだろう⇒興味が増大し、持続している
・スピーチのテーマと、聴衆の特性を考えて話の内容を決める。
・構成⇒起承転結。
起＝子育ての誤りに気づく。
承＝改善への努力。
転＝武君がバトミントン部に入部し伊藤さんの努力の成果が表れたと思ったが、マネージャーだった。「男なのに」という思い。
結＝武君の考えを理解し認め、やりたいことを応援するのが親の務め、子どもの人生は子どものもの。親のものではない。親の価値観を押し付けてはいけない。

（２）話の印象を強め、忘れがたいものにする

・ヤマ場は目に見えるように描写する。（頭の中でイメージできるように。映像化できるように。）
「僕出来ないもん」とうつむき加減で手を後ろに組み身体を左右に揺らす。
・インパクトのあることば→「三つ子の魂百まで」
「籠に乗る人、担ぐ人、そのまたわらじを作る人。」

（３）話の説得力を強める

伊藤さんの話を聞き、子育てにおいて、いかに「ことばの影響力」が強いか理解できる。
人格を否定するようなことばがけは、子どものやる気の芽を摘んでしまう。
子どものやりたいことを理解し認め、応援するのが親の務め。親の価値観を押し付けてはならい。

・主題にあった事例
・自分の体験に基づいた事例。
・聴衆の関心事に応える内容。

聞き手の心を動かすことにより、話の説得力を強め、実践へと促す。

２．心を動かすには

＊資料１の事例から考えてみよう。

（１）心を動かす描写

① まず中心人物に聴衆の好意的関心を集める⇒先生と少年に対する好意的関心。
少年の境遇に同情し「頑張って」と感情移入し応援したくなる気持になる。
先生の少年への接し方に好意を抱く。

② 中心人物の気持を再体験しながら話す⇒話し手が、先生や少年になったような気持で話す。想像力が必要。

③ 中心人物の言動は説明するより再現してみせる　（ただし、抑え気味に）
・少年の境遇を、過去の担任の先生の記録によって分からせる。
・会話の使用（臨場感が出る）。
・カードの内容から、その後の少年の経緯が分かる
説明調による話の展開は、聴衆を客観的にさせるために、話の内容に感情移入しにくくなる。第三者的な視点で話を聞く。

④背景の描写は必要なものだけ、くっきりと
・「服装が不潔でだらしなく、どうしても好きになれない少年」なぜこのように思ったのかについて必要な情報だけを担任の記録で示している。少年の境遇が分かるように。

⑤実在感を出すために、匿名より仮の名を使う。
・ある少年⇒弘樹君　前述の例であれば、講演者⇒伊藤さん。その息子⇒武君

（２）主題の深め

＊資料２、に示した話を事例に用いてスピーチすると仮定した場合、どのような主題が考えられるか、思いつく限り書いてみましょう。

1.
2.
3.
4.

＊資料３の主題を深めてみましょう

テキスト３---単元６「テーブルスピーチ」

１．テーブルスピーチとは

会食などをともなった席で行われる短いスピーチを、日本ではテーブルスピーチと呼んでいます。結婚披露宴、歓送迎会、祝賀会、追悼会などがあります。
テーブルスピーチは和製英語で、英語圏では after　dinner speech　といいます。

2．テーブルスピーチの役割

・会合の目的をつかむ
結婚披露宴＝新郎新婦二人の門出を祝福する。主役は新郎新婦
歓迎会＝入会を祝う。快く迎える。先輩との交流。
送別会＝功績への感謝と惜別の意を表わす。今後の活躍を応援する。
忘年会＝・社員の慰労。　・接待としての忘年会もある
新年会＝新年を祝う。今年の目標を語り結束を強める。会の発展を祈願する
祝賀会＝何のお祝いかを理解する。創立記念、賞の受賞など
追悼会＝故人を偲んで、いたみ悲しい気持を表わす
・スピーチする自分の立場・役割を考える
主催者であれば出席者が快く参加できるように配慮し盛り上げる。
上司としてのお祝いのあいさつか、友人としてか、同僚としてか、先輩としてか

３．スピーチをするにあたって

（１）スピーチの基本

①　スピーチの五原則（テキスト１）をまもる

・短く簡潔に　・その場に合わせて・独創的に・明るく楽しく・印象的に

聴衆に何かを知らせたり分からせたりしょうとする話をスピーチと言います。スピーチには、講義や演説、会合でのスピーチと色々種類がありすが、ここでいう五原則はテーブルスピーチのように短いスピーチに対するものです。

②　はっきりとした平易なことば　　③　かまえずに会話調で

（２）スピーチの話題

＊結婚披露宴でスピーチした経験がある人は、どのような話題でスピーチしたのか出し合って見ましょう。

（３）スピーチの注意点

結婚披露宴の場合を考えてみましょう。

①　自己宣伝をしない

上司として新郎の仕事ぶりを紹介をするつもりが、会社の話になってしまった
会社や会社の商品などの宣伝は慎む

②　列席者を傷つけない

列席者を傷つけない話題の選択をする。

③　不吉な話をしない

死、離婚を暗示するようなことば、忌みことばは使用しない。

④　ゴシップめいた話をしない

結婚に反対されていた二人。前の会社は喧嘩して辞めたなど

⑤　調子にのってふざけ過ぎない

お酒の勢いで品格を疑われるような言動はしない。

テキスト 3---7 単元「大榮の前での司会」

１．司会とは

会合の進行を担当することを司会と言います。（定義）
司会で大切なことは、参加者全員を会合の目的に向かってまとめていくことです。
会合の進行役としての司会→大勢の前で行う。

（１）大勢の前での司会の種類

①　儀式的な司会

きちんとした儀式としての形式が要求される。組織によって決まった形式があるので事前に担当者と打ち合わせをし、その組織の形式を守る。勝手に変えてはならない。人生の節目となる儀式であるため、厳粛な雰囲気が要求される。式次第に沿って淡々と間違いなく進める。

②　進行係的な司会

予定のスケジュールを整然と進めていくための司会。時間内に会が終えられるように時間管理をすることが重要。時間配分が狂ってきたら時間を調整する。

③　宴会的な司会

楽しい雰囲気を盛りあげる必要のある司会。乾杯までは儀式的な雰囲気が望まれる場合が多いので、けじめをつけた進行を心がける。

＊会の目的をしっかりつかみ、それにふさわしい進め方をする。

２．司会の準備

司会の成功の秘訣は、綿密に準備をし、予め頭の中でシミュレーションしておくことです。

（１）主催者との打ち合わせ
（２）前日までの準備
（３）当日の確認

＊話し方まつりの司会
＊合宿の司会
＊研修会の司会
＊記念祝賀会の司会
＊懇親会・忘年会・新年会の司会

話し方まつり

予定されているプログラムが、滞りなくスムーズに進行できるようにしておく。
入賞者の表彰式や講師の辞令交付の時は、儀式的な厳かな雰囲気が出るように淡々進める。

・出場者を紹介するときには、明るく活気がある雰囲気を出す。→声の出し方の工夫。語尾はあげ気味。はっきりととおる声。
・責任者との打ち合わせ。会場下見。司会者二人で予め練習
・当日は早目に会場入りする。マイクチェック
・欠席者の確認。
・シナリオ作成
名前を読み違えないように、確認。フリガナを書いておく。
順番を飛ばさないように紹介し終わったら、線を引く。
休憩時間は「あの時計で〇〇まで」二回案内する。
・体調管理

３．司会の進め方

①　開会は方向づけを考えて

参加者の意識を会の目的に向ける。研修会の司会であれば「〇〇について理解を深め実践に生かせるようにしっかり学んでいきましょう」

②　順序に従って円滑に

式次第、プログラムなどに沿ったシナリオを作成し円滑に進行する。準備が大事。

③　参加者全体の反応に目を配る

聞こえているか、内容は理解されているか、全体を支配している空気はどうかなど、しっかり観察しながら進行する。

④　ハプニングにも素早く対応する

機会の故障、雑音、空調不良、出席者のトラブルなどに素早く対応する。

⑤　しゃべり過ぎないように注意する

会合の進行に関すること以外の余計な話はしない。司会者は会合の進行役であることをしっかり認識する。

⑥　気持のよいしめくくり方を工夫する

出席者が会合に参加して意義があったと、再認識してもらえるようなしめくくりをする。

⑦　会合の終わったあとにも心をくばる

確認事項、お知らせ、お誘い等も忘れないようにしましょう。会合への協力に謝辞を述べ、出席者が会場を後にするまで　失礼のないように心をくばる

テキスト３---単元８「さらに自己表現を高めるには」

＊「聴衆や外的条件に予想外の事態が生じた」という体験談を出しあってみましょう。

１．話し手の意識

（１）聞いてもられる人間関係を作りながら話す

・会場に入室してから、話しはじめる直前まで、あいさつ、姿勢、表情、目配りを通じて、明るく、親しみやすく、落ち着いた印象を感じ取ってもらえるように努める。
・健康講座を聴講した際、講師が清瀬市の自然の美しさを讃えていた
・金光先生の講演「里芋がシモゲちゃったということあるでしょう」
・小泉進次郎の応援演説

（２）調子がよいときも悪いときも、さらにしっかり分かってもらおうと全力を尽くす

その日の体調の良し悪しや、会場に慣れているか否か、聴衆が作り出す雰囲気の良し悪しなど様々な要因によって話し手の心が左右されます。どのような場合であっても最後まで分かってもらおうと全力を尽くせば、それが態度に表れ、いつの間にか聴衆も好意的に聞いてくれるようになります。

（３）第三者の耳で自分の話を聞く余裕を持つ

分かってもらおうと全力を尽くすことは大事ですが、話すことに夢中になり、聴衆分析ができなくなっては、独りよがりの話になってしまいます。話をしている自分、その話を聞いて分析批判している自分、要するにもう一人の自分を作り出して、第三者の耳で自分の話を聞く余裕を持つことです。そうすれば、仮に「行き過ぎ表現」をしてしまった場合でも、すばやく対応することができます。

２．日常の心がけ

「文は人なり」。同じように話もその人の人柄をあわらします。人間として少しでも良くなろうとする心で日常を過ごしていると徐々に、学んだことこが身についていきます。

（１）人間関係をつくる基本を常に実行し、身につける

テキスト１で学んだ、人間関係を築く話し方をもう一度振り返える。

「知って行わざるは、知らざるに同じ」（貝原益軒のことば）

あいさつ、会話の仕方、態度、話の聞き方、肯定的な表現、敬意を表わす表現、人に好かれるにはｅｔｃ。失敗しつつも繰り返し実践していくことで身についていく。

（２）日々の体験の受けとめ方について、きのうまで気づかなかった新しいことを見つけだすように努力を続ける

・「主題の深め」に通じる。

・テキスト１単元２の３．話材と話題（１）「話材を豊かにするには」＊参考

・体験したことを振り返り深く考えてみる。情報を受けとるとき感性を敏感に働かせる。

＊西沢泰生先生との打ち合わせ